

中原中也『朝の歌』

奈良 敏行

(笈の定有)

「笈の定有」はオブセッションを遡上する。古い愛読書を「笈」から取り出す。大岡昇平の『朝の歌』だ。《人が一生のうちの実現できる思想は、二十五歳までに包懷されたものだけだといったのはベルグソンである。ただそれを展開するためには、一生かかっても足りない」と、たしか付け加えてあったと思う。》

若い日に優れた他者と出会えるのは幸せなことだ。しかし自己確立の途上に才能ある人々が出会ってしまうのは悲劇でもある。大岡昇平はそんな悲劇の目撃者だった。二つの才能の葛藤のど真ん中に遭遇したのだった。中原中也と小林秀雄。中也は小林を次のように批判している。

《この男はかつて心的活動の出発点に際し、純粹に自己自身のスナワチ魂の興味よりもヴァニティの方を一步先に出したのです。》（「小林秀雄小論」）

中原中也という純粹精神とその批評精神を目撃し創作ができなくなつて批評家になつた小林秀雄という男の出会いの消息だ。この分岐点に「初発衝動」の生成を見る。大岡昇平はいう。

《西欧の文化の理解が進めば、その頽廢もまた影響せずにはいない》

《しかしこれ等がサロンも貴婦人も二輪馬車もない日本の六畳の書齋の憂鬱に撰取されたということが、病状を悪化させる。》

中也は故郷から逃れるようにして京都の立命館中学へ進む。そこで三ヶ月間ほど国語を教えていた富倉徳次郎の知己を得、富倉の同級生だった富永太郎を知る。太郎はいち早くボードレールを発見していた。そしてその頽廢に閉塞していた。そこへ友人小林秀雄がランボオを教える。ボードレール―ランボオの発見がこの青春群像の事件だった。

そして富永太郎は「秋の悲歎」という詩をつくる。

《私は透明な秋の薄暮の中に墜ちる。戦慄は去つた。道路のあらゆる直線が甦る。あれらのこんもりとした貧婪な樹々さえも闇をまねいてはいない。》

ランボオの「別離」を思い起こさせる詩だ。そして救済をうたうのだが、救済の到来を信じてはいない点で共通

だ。救済に見放されてランボオは『地獄の季節』から『イリミニシオン』へ歩を進める。字句の聚集（大岡昇平）が魅力なのだが、富永太郎もつぎのように言葉を張り渡す。

《炎上する花よ、灼鉄の草よ、毛皮よ、鱗よ、羽毛よ、音よ、祭日よ、物々の焦げる臭いよ。》（「鳥獣剥製所」）
ランボオに次のような一節がある。

《森のはずれに――夢の花、静かに鳴る響き、光輝く》
《迎る小道は起伏して、丘陵を、えにしだは覆い、大気は動かず、ああ、はや遠い、小鳥の歌、泉の声。行き着くところは世の果てか。》

ボードレールは自己の美意識に閉塞した。救済は外部へ出ることの他にはない。しかし外部へ出れば、その「美」は失われる。ポスト・ボードレールのランボオは言語的な解決でなく実行によって外部へ出てしまう。

西洋から渡ってきた「美意識」とそこからの「脱出」というそんな葛藤の時代に、中也と小林秀雄が遭遇した。「事件」だったのだ。

いま甦るのは小林秀雄だろうか、中原中也だろうか。中也について、大岡昇平はいう。

《彼は詩人として当然ですが、いい耳を持っていた。翻訳語に限らず俗語から響きのいいものを選んで、自分の詩に

はめこむことも知っていた。何よりもこれは朗読し易く、歌いよい詩であった。》

富永太郎は二十四歳で生涯を終え、中也は三十歳で死去する。「外部」へ出なかった、それゆえの純粹精神は美しい。これらの純粹精神に出会ってしまった小林秀雄は得たものと失ったものとを背負って生きることとなる。

「笈の定有」は、この「事件」を甦らせる。『朝の歌』を読もうよ、とオプセションへと誘う。呼応する人はいらるだろうか。

2025. 02. 20

（参考）

大岡昇平 『朝の歌 〈中原中也伝〉』角川書店 1958

小林秀雄 『考えるヒント4 ランボオ・中原中也』文春文庫 1980

富永太郎詩集は「青空文庫」も参照しています。

